

第1編 原始・古代

田 舟（箕輪遺跡出土）



はじめに

長い歴史と豊かな文化に培われた箕輪町をみる時、その地勢は、天竜川が町の中央平坦地を南流し、東西には地理学上有名な河岸段丘の著しい発達を見、段丘下の沖積地は古来からの広い水田地帯、西部は西天竜水田地帯から扇央部の畑地帯と続き、中央アルプス前山に連なっている。南は南箕輪村、伊那市に、北は辰野町に接し、東は高遠町、諏訪市に境している。この地勢における河岸段丘と扇状地は、古来より人々の居住地に最も適していた。町内にはあちこちに二百か所余の原始・古代の遺跡があり、そこからはおびただしい量の遺物が発見されている。それらの遺跡のなかには一万年以上という遠い昔の人々の生活の跡を伝えるものもある。そうした遺物や遺跡を中心に原始・古代の箕輪の歴史を類推することができる。

限られた資料で当時の人々のくらしを復原することは非常に困難なことであるが、まず町内にはどのような遺跡があり、そこからはどんな遺物が出土しているかを中心に著わしてみた。その調査の過程や、発掘調査を重ねるにつれて、最近の急速な開発と都市化により、広い地域の地形がわずかの間に一変するようになっていることが多くみられる。そのため貴重な文化財が失われつつある。記録保存のための調査が毎年のように行なわれているが、失われた遺跡・遺物もあったであろう。町内における遺跡の発掘調査は昭和四十年秋に実施された萱野遺跡が最初である。その後四十年代から五十年代にかけ毎年のように実施されている。発掘調査を行なって記録に残したものはわずかであるが、それらを中心に、できるだけ多くの資料を収録し紹介している。

まず第一章においては、考古学よりみた箕輪町の概要を時代を追ってその推移を記し、時代的概観とその特徴をまとめた。

第二章は箕輪町内を地形により次のように五つに区分し、各節においてその地域的まとめに主眼をおき主要遺跡について記した。

第一節 西部山麓の遺跡（西天竜水路から西）

第二節 天竜川右岸段丘上の遺跡

第三節 沖積面の遺跡（第二段丘を含む）

第四節 天竜川左岸段丘上南部の遺跡（箕輪地区）

第五節 天竜川左岸段丘上北部の遺跡（東箕輪地区）

第一章 考古学よりみた箕輪町

第一節 箕輪の考古学的調査のあゆみ

箕輪町の歴史を振り返る時、まずこの地の考古学的研究の歩みをひもとかねばならない。江戸時代においても考古学的な遺物の出土はあったようであるが、関心をもって扱われるようになったのは明治になってからである。南小河内の小口静雄は上の平遺跡や王墓古墳の出土品を採集していたが、なんといっても学問的・考古学的調査が実施された最初は、鳥居龍藏博士による上伊那郡内一円の調査であろう。大正十年から同十三年にかけて、数回実地踏査と資料の採集を行ない、箕輪町にも足を運んだ。小口珍彦も博士と同行している。この成果は大正十五年三月『先史及原史時代の上伊那』として刊行されている。これは上伊那郡内はもとより当時の日本考古学会に与えた役割は多大なものがあり、大事業のスタートであった。鳥居博士はその序文において、「わが国

第1章 考古学よりみた箕輪町

の学術が今や官学たる大学の手のみならず、これを離れて民間にも移って行く」ために「南信―本郡がこれの先駆者たるを得たり」と述べられている。この時の調査により郡内に埋蔵文化財尊重の気風が大きく植えつけられたといえる。

この調査における箕輪町関係の遺跡・遺物としてまず松島王墓古墳が上げられる。この時に同古墳は初めて実測し、図化されている。他に上の平遺跡出土の金銅製誕生仏(写真1・1)・土偶、長岡新田出土の弥生時代有孔石斧(写真1・2)、松島臼杵神社の石臼と石棒、長岡の角畑古墳などが調査されている。大正から昭和初年にかけて西天竜開田により、竜西段丘上は広く開発された。この開発に伴って出土した遺構・遺物は笠原政市・有賀京一等により記録に留められている。長岡においては土取り工事で壊滅した古墳を調査し、上の平を中心に多量の出土遺物を収集分類した大槻幹・井沢武雄は、この道の先駆者である(写真1・3)。戦後になり天竜川沖積面の土地改良事業に伴って発見された大量の遺物、これを採集整理された小池修兵・小川守人、今日の箕輪遺跡あるはまさにこの二人の力なくしてはありえないことである。小川守人は大正末期より約五十年間、竜東地区を中心に全町的に遺物を收集整理し、そのすべてを町郷土博物館に寄贈している。今日なお氏の収集品は博物館



写真1・1 金銅製誕生仏
上の平遺跡出土 現高 7.3 cm

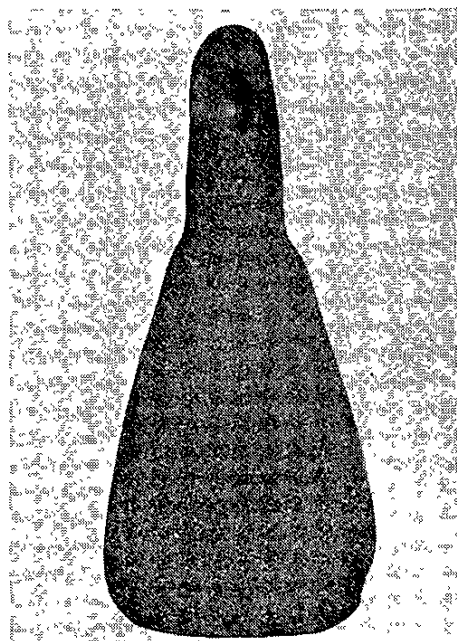


写真1・2 有孔石斧

展示室の重要な位置を占めている。また戦後発足した箕輪史研究会の会報に寄せられた小池修兵の箕輪遺跡を中心とした報告書は、考古学的調査報告として貴重な内容を記している。昭和四十年秋に実施された三日町萱野遺跡の発掘調査は、本格的な考古学的調査のスタートであり、その意義は大変大きなものであった。その後圃場整備事業や道路の工事に伴う発掘調査は毎年のように実施されている。主なものとして、竜西段丘上ベルト地帯において、猿楽・南城・北城・上の林・中山遺跡、大形農道工事に伴う並木下・五輪遺跡、中央自動車道開通工事による中道・堂地遺跡、天竜川東岸段丘上の圃場整備事業による大原・御射山・澄心寺下・天王塚古墳等の遺跡、沖積面においては道路開通に伴う箕輪遺跡調査等々である。町教育委員会においてそれぞれの調査報告書が刊行されている。

先人により収集、調査された出土遺物の多くは、町郷土博物館に保管・展示され多くの人々の見学の対象となっている。考古学的調査は今後共に続くことであろうが、遺跡を保護・保存し、後世に伝えることの重要性を考へなければならない。



写真1・3 大槻幹氏収集資料

第二節 考古学的概観

一 先土器時代

遠い人類の起源に思いをめぐらせる時、そのあまりにも遠く隔たった時間のゆえに、実感として伝わってこない、数十万年とも、二百万年以前ともいわれる人類の出現時期、この間に人類はどのような進歩をとげてきたのであろうか。この時代は地質学でいう「洪積世」であり、氷河時代とも呼ばれている。日本においても人類の足跡を記す遺物（主として石器）が各地で発見され、それらは十数万年前にまで溯るといわれ、次第にその年代も遡^{さかのぼ}っていく様相を呈している。

さて私たちの住む伊那盆地においてはどうかであろうか。木曾山脈と赤石山脈の中央を流れる天竜川によって伊那盆地の地形は出来上がっている。特徴ある河岸段丘と扇状地形、この上にその足跡をみることができ、それらは土中深く埋まっているものが多く、テフラ層と呼ばれる赤土中から石器が出土している。赤土は洪積世末期におきた火山爆発によって灰が埋積してでき上がった地層と考えられている。

昭和三十三年十一月、南箕輪村神子柴から出土した石器の一群は、伊那盆地の人類史を大きく変える発見であった。尖頭器や大形局部磨製石斧等の特徴ある石器類であり、この発見により先土器文化の存在がにわかに脚光を浴び、出土遺物においても、石器が注目されるようになった。箕輪町内でも先土器時代の遺物と比定される石器類が何点か発見されている。それらはほとんど表面採集のため出土地層の確認はされていない。

写真1・4の1は南小河内上の平城跡の台地上から藤林正則によって採集されたものである。両端が欠損し胴部のみであるが、現長五・五cm、最大幅四・一cmを計り、器面は縁辺から加えられた並列剝離が施され、両面加工で丹念な調整が行なわれている。断面は凸レンズ状を呈し、残存胴部の形状から全長は十三cm前後であり柳葉

形尖頭器の一部と推定される。形状や剝離の状況は前述の神子柴遺跡出土の尖頭器とよく似ており、石質はケイ岩である。今後十分に注意しなければならない地域である。2は富田大久保遺跡から出土したもので、黒曜石製で、これも両縁辺からの剝離が並列に施され端正な形に仕上げられている。全長六・四cmと小形であるが、柳葉形を呈した尖頭器である(富田区向山千春採集)。3は下古田龍ヶ崎から小平宏によって採集されたもので、全長五・二cmの黒曜石製尖頭器である(写真1・4)。

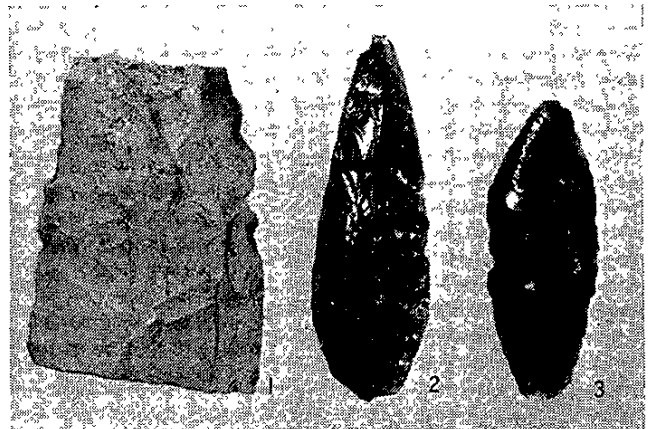


写真1・4 町内出土の尖頭器

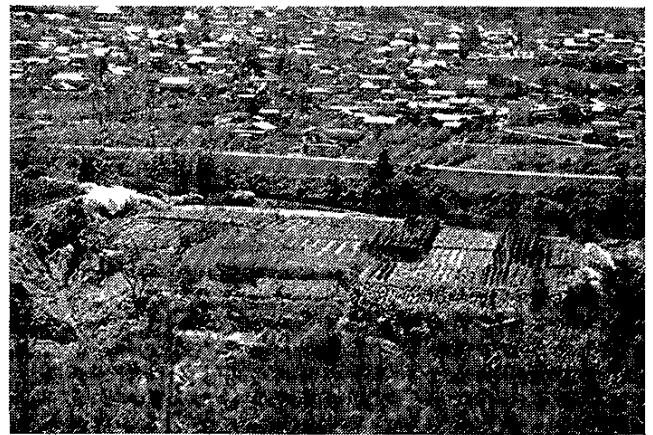


写真1・5 上の平遺跡遠望
(北側の山から見下ろす)

これら尖頭器の出土は数も少なく、本格的な発掘調査によって出土した遺物でないため、出土地層などの確認はされていないが、近い将来この時代の人々の生活が復原される時が来ると予測する。町内では今のところ先土器時代の遺跡として確認される場所はないが、地形や採集遺物から、南小河内上の平遺跡は十分考えられる場所である(写真1・5)。また、西部山麓の扇頂部、竜東の小台地上においてもこの時期の遺跡が存在するものと考えられる。

先土器時代から縄文時代へ移行する時期(一万二、三千年位前)の遺物として、細石器や有舌尖頭器がある。(図1・1)は南小河内上の平遺跡から大槻幹によって採集された小形爪形搔器である。これは別名拇指状搔器ともいわれ親指の爪くらいの大きさで、全縁あるいは一部分を調整して刃部を形成し、搔器として使用したと考

小池修兵によって採集された有舌尖頭器である。全長七・八cm、最大幅一・九cm、厚さ六mmを計る。先端をわずかに欠損しているものの、両面共に丹念な剝離を連続して調整し、両縁辺は鋭い刃部になっている。基部は両側から挟り込んでいるが、舌部はやや短く作り出されている。この種の尖頭器は狩猟時における投槍として使用したものと考えられている。以上先土器時代及びその末期の遺物と考えられるものを上げてみたが、これだけの資料からでは当時の人々の生活を復原することはとても困難である。今後この時期の遺跡を発掘調査する機会が必

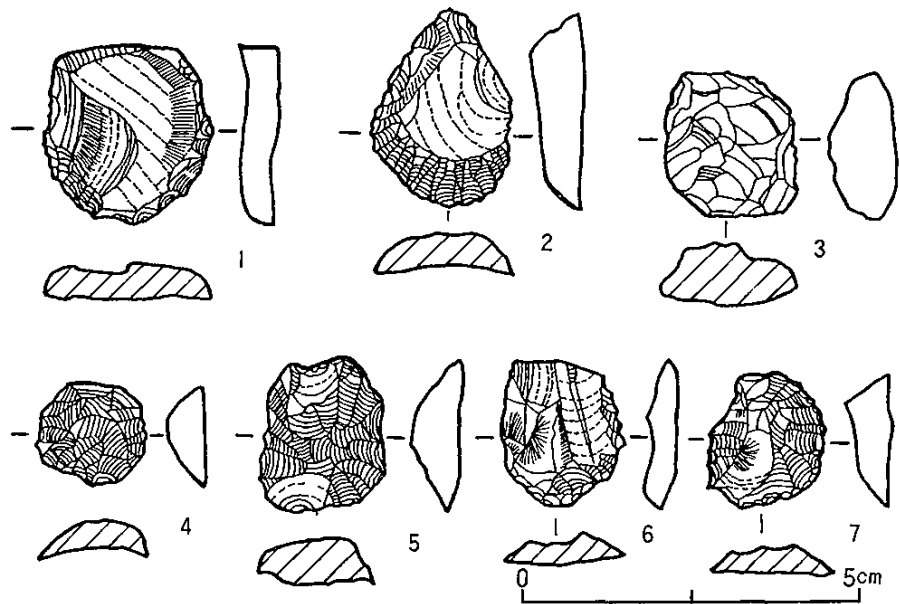


図1・1 小形爪形搔器（上の平遺跡）

えられている。この爪形搔器については『上伊那誌歴史篇』では次のように述べている。「拇指状搔器は、有名な諏訪湖底遺跡から数多く出土していて、最近では細石器時代のものとして位置づけられている。沢川上流や南小河内の上の平などからの出土があり、諏訪地方との境にあたる溪谷と水系にあり、曾根湖底遺跡との関係を重視しなければならない。」遺物の採集時において注意しなければ見落してしまうことがあり、数少ない資料として注目しなければならない。写真1・6に示したものは、箕輪遺跡から

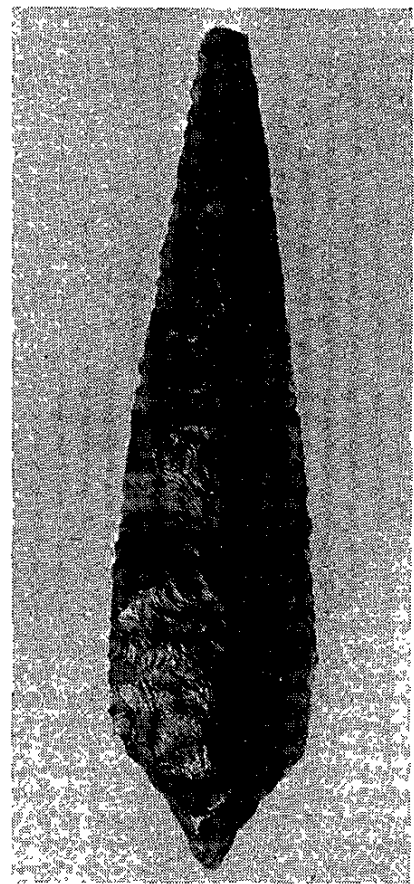


写真1・6 有舌尖頭器
（箕輪遺跡）

要である。

二 縄文時代

氷河時代も終わりに近付くと、気候が温暖化する時期が来る。このころ人々は土器を作るといいう大発明をした。これが人間の生活に大きな変化を与えたのである。土器につけられている縄目文様から縄文土器の名がおり、縄文時代と呼ばれるようになった。

縄文時代は、土器の研究によって、草創期・早期・前期・中期・後期・晩期に分けられている。放射性炭測定素法^(C¹⁴)で測定すると、最も古い草創期の土器は一万二千年位前という年代を示す。弥生時代の始まりを二千三百年前ころとすると、縄文時代は約一万年という長い間続いたことになる。人々はこの時代をどのようにに生活し、発展したのであろうか。この時期を次の三期（成立期・発展期・終末期）に区分して町内の縄文時代遺跡を概観する。

（一）成立期（草創期・早期）

土器の出現 人間の生活に与える影響として自然現象は最も大きなものである。寒さの続いた先土器時代は植物もその影響から針葉樹林が広がっており、そのため食用植物には恵まれず、動物性食料に多く頼って生活していた。それを裏付けるように、出土する石器類は大型獣を狩るための尖頭器や、調理するための搔器の出土が多い。気候が次第に温暖化してくると、それまでの針葉樹は姿を消し、かわって落



写真1・7 萱野遺跡発掘状況

葉広葉樹林が広がってくる。広葉樹林には食べられるでん粉質の木の实がたくさんあり、植物性食料が豊富な時期である。この時に土器が出現するわけである。土器はこれらの植物性食料を加工・貯蔵する用具として生まれたのではないかと考えられる。たとえば深鉢は煮沸具・貯蔵用として適した形をしている。このように縄文時代の幕開けは気候の変化による植物環境と深い関わりがあったと推測される。

前述した石器類（8頁の先土器時代から縄文時代への移行期の遺物）は草創期の遺物として位置付けることができ、この時期の土器類は三日町下の観音遺跡から発見されている。現在のところ町内では最古の土器といえる（椀ノ湖Ⅱ式）。早期の中ごろになると人々の生活の痕跡をあちこちで見ることができ、萱野遺跡（写真1・7）・椀木沢遺跡（富田区）など比較的標高の高い位置にそれを見ることができ、早期後半になるにつれ、人々は台地や河岸段丘上に進出してくるようになる（上の平・大原・澄心寺下・上の林・中山の各遺跡）。この時期の遺跡は竜東の台地や扇頂部にも多く分布している。

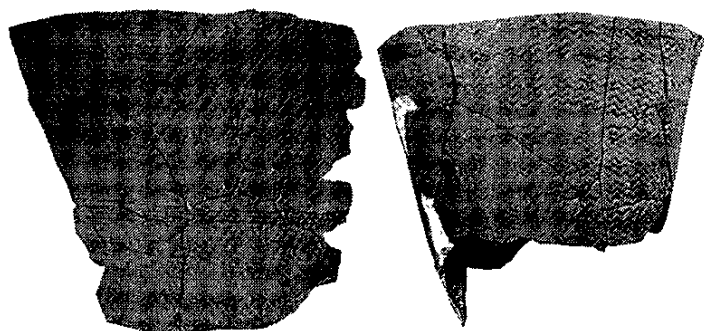
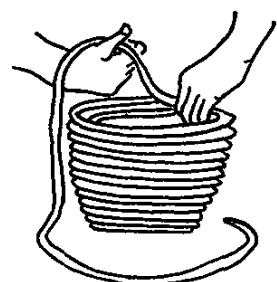


写真1・8 山型押型文土器（澄心寺下Ⅱ遺跡）



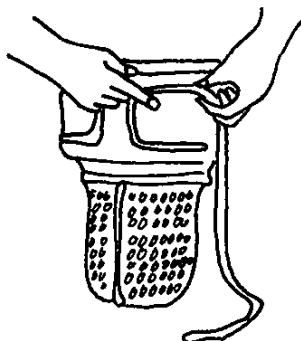
↑ねん土^どひもをらせんにまき上げて形をつくるまき上げ法



↑輪^かにしたねん土^どひもを積み上げて形をつくる輪積み法



↑縄文^{じようもん}のつけ方^{かた} 細い^{ほそ}なわをつくり 器面^{きめん}にころがす。



↑突帯^{とつたい}・隆起文^{りゅうきもん}のつけ方^{かた} ねん土^どひもを器面^{きめん}にはりつける。

図1・2 土器作りの図

(二) 発展期(前期・中期)

食生活 今から四、五千年位前のこの時期は遺跡数が急激に増加し、それも大きな集落になっている。段丘上突端や広い台地上に集落を形成し生活の舞台を展開している。前期は温暖期の最盛期で、落葉広葉樹林が広く平地にまで進出したと想像される。そのためドングリ・クルミ・クリ・トチなどの木の実が豊富に採集された時期である。「世界各地の食料採集民の食料を手に入れる方法を調査した結果によると、赤道直下から北緯・南緯ともに四十度までの熱帯と温帯に住む二十八種族のうち二十七種族までが食用植物(一部の種族では貝の採集を含む)に最も多く頼って生きている。この地帯は、獣も魚もたくさんいるけれども、食用植物を集めるのが一番楽で、しかも安全な食料獲得法だからである。北緯・南緯四十度から六十度に住む二十二種族のうち十五種族は魚を主要食料としている」(小学館『日本の歴史』より) (北緯四十度は青森県)。

このことでもわかるように主食を植物性食料に負うところが大きであったと想像される。縄文時代中ごろの日本列島は大別して南―東日本はドングリ地帯、北日本は魚地帯だったと考えられる。食物獲得手段として植物性食料の採集が主であったと想像したが、それを補う手段として狩猟・漁撈が考えられる。これも気候の温暖化により生息する動物にも変化が生じ、それによって狩猟具も投げ槍から弓矢の出現へと移行した。多量に発見される石鏃(写真1・9)は弓矢の利用度の高いことと、長期間の使用を物語るものである。また天竜川やその支流での漁撈も盛んであったと思われる。石錘や土錘(写真1・10)(写真1・11)の発

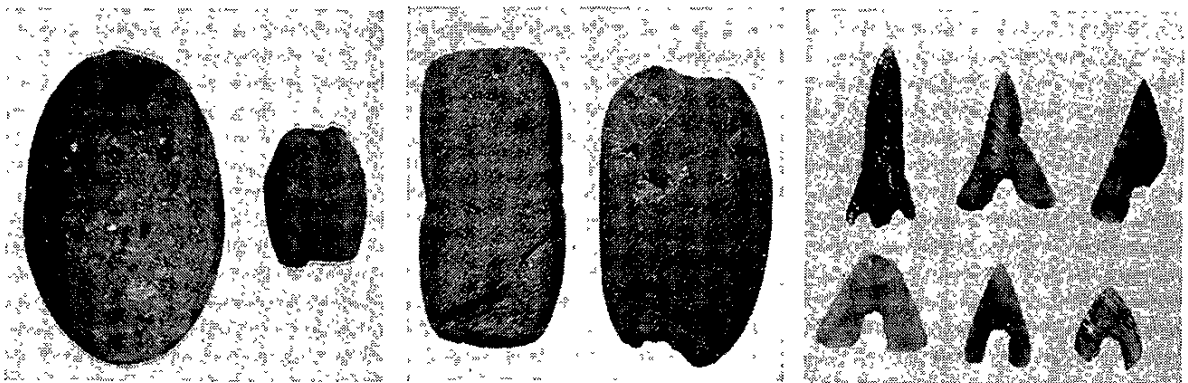
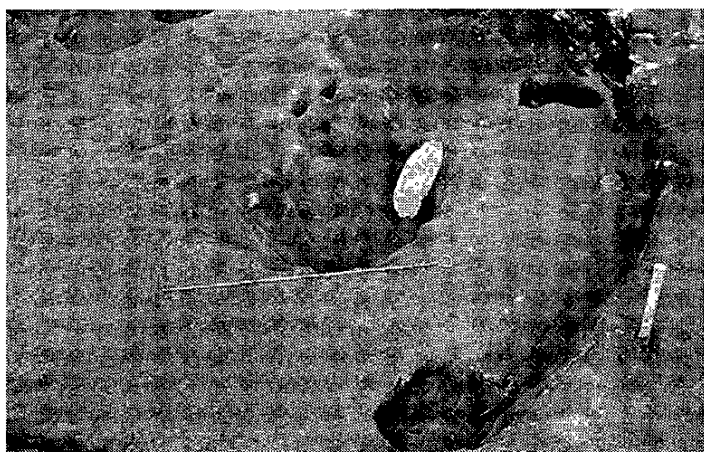
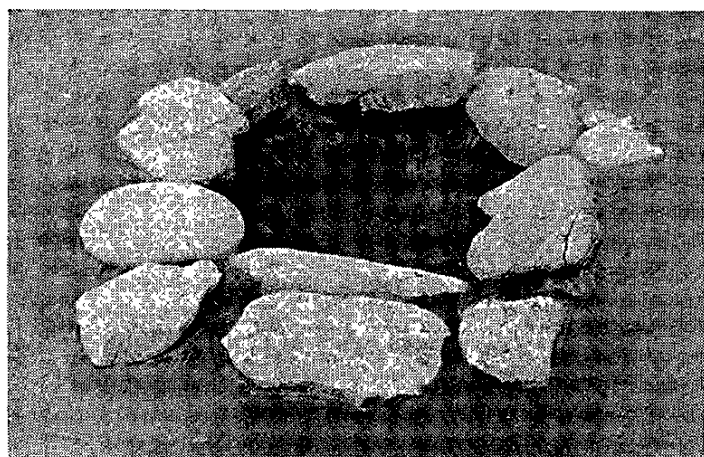


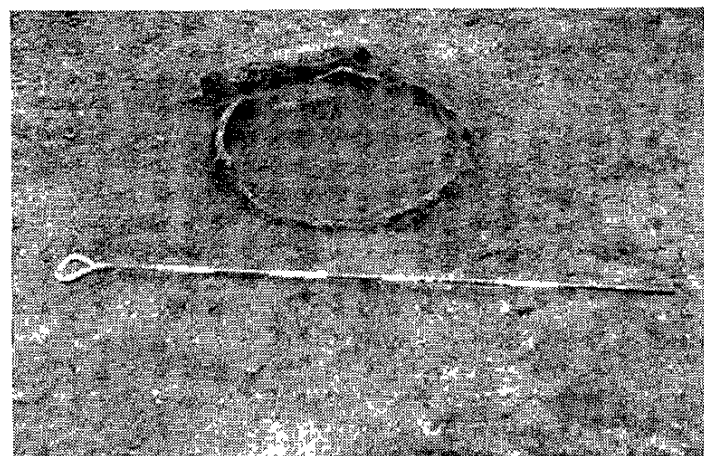
写真1・11 土 錘 写真1・10 石 錘 写真1・9 石 鏃



1



2



3

写真1・12 炉 址
 1 掘込み炉 (上の林遺跡)
 2 石組み炉 (御射山遺跡)
 3 埋 甕 炉 (上の林遺跡)

見は釣りや網を用いての漁法を推測することができる。これらの食料確保手段も四季おりおりの季節に応じて実施されたことが容易に想像できる。

住生活 食料確保が最も重要な仕事であった縄文人は住居の場所も強く考慮されたと考えられる。日当りや水の便なども考えられたことはいうまでもない。彼らは地面を数十cm掘り下げ、竪穴住居に住んでいた。この住居は夏は涼しく冬暖かい。中央に炉を設けてあるため、寒さがしのげ、食物の煮炊きに、夜の明かりに役立つのである。一間^{ひとま}しかない住居において炉はまさに中心であり、この周囲ですべての生活がなされたのである。炉の形態を見る時1は大きく掘り凹めて炉にした掘り込み炉と、2は石で囲んで形を作った石組み炉に大別されるが、3は炉の中に大形の土器を埋めてある埋甕炉も見ることができる(写真1・12)。住居とともに炉からも変遷が

感じられる。この時期においては住居の平面は円形か楕円形で、主柱が四本の場合が多い。町内で検出された住居址もほとんどこの形態を示している。

土器 縄文時代前・中期の文化として大きな特色は土器文化の著しい発達である。遺跡数の増加に並行して出土する遺物も多くなることは当然であるが、その内容において種類と器形の変化・発達は眼を見はるものがある。前期においては出土数も少なく、その器形も変化の小さい深鉢形土器が多いが、中期初頭から中葉に入ってくると、器形の大形化にともなって立体的な装飾把手をはじめ、土器全体が文様で埋められ、力強いエネルギーと沸き上がる生命力を感じさせる土器が多い。これは人々の生活や精神面を反映しているように考えられる。この時期は勝坂式文化と呼ばれ、中部山岳地帯を中心に関東地方まで広く分布した文化である。土器に動物や人面



写真1・13 黒津原遺跡出土土器（現高31.5cm）



写真1・14 矢田尻遺跡出土土器（器高27.4cm）

第1章 考古学よりみた箕輪町



写真1・17 祝神遺跡出土土器
(器高18.3cm)



写真1・15 幸道遺跡出土土器
(現高23.7cm)



写真1・18 丸山遺跡土器 (現高41.3cm)



写真1・16 御射山遺跡出土土器
(器高48.4cm)

などが随所に付けられたのもこの時期であり、多くの土偶（土偶・顔面把手・蛇身装飾の項にて別に示す）の出土は信仰的要素を多分に持った傾向が窺われる。

写真1・14は福与卯の木、矢田尻遺跡出土のものであるが、キャリパー形の器形をし、口縁部付近に粘土紐や彫刻による装飾文様や雄大な把手が集中して付けられ、絞られた胴部以下を縄文で埋める様式があり、勝坂式のクライマックスに達した時期の所産と認められる。

このたくましいエネルギーは中期の後半までにその一部が残るが、文様や把手は次第に簡略化、抽象化が進むようになる。また住居址からは土器がセットとして出土するようになるのもこの時期であり、千葉市の加曽利貝塚出土の土器を標式としたいいわゆる加曽利E式土器が出土するようになる。大形で口縁部の平らな平縁の深鉢形土器の一群が見られる。埋甕に用いられるのもこの種の土器で沈線文様を主体にしたものである。長い縄文時代において最も華やかなまた力強い土器文化が中部山岳地帯を中心に発達したのは何に起因するのだろうか。

中期農耕文化の存否 前述のように縄文中期には遺跡は急増し、その出土遺物を見ても、生活の安定と繁栄を如実に窺うことができる。この現象については複数の要素が絡み合って成り立ったものと考えられる。前期から中期にかけて気候の温暖化により自然環境が豊かになり、動植物性食料が豊富に得られたことは容易に想像される。食料の確保は生活の最も基本的な要素であり、これは人間（縄文人）の増加した第一の要因である。中期における遺跡数の増加は当然人口増を裏付けるものであるが、人口の急増と生活の安定は自然食品（狩猟・採集）のみによるものであろうか。このことにつき、藤森栄一は次のような点を根拠に縄文農耕存在の可能性を主張された。

- (1) 狩猟具である石鏃が減少したこと。
- (2) 土掘り具と思われる打製石斧の急激な増加と大形化。
- (3) 土器形態のセット化（煮沸形態―深鉢形土器、供献形態―浅鉢・装飾過多の深鉢、貯蔵形態―有孔罌付土

器など)。

(4) 大形粗製石匙の登場。

(5) 大形石棒あるいは土偶・土器文様などからうかがえる地母神への生産の祈り。

(6) 石皿を伴うパン状炭化物の存在(富士見町曾利遺跡)。

これらの点を考慮して「中部高地の文化内容は極めて農耕社会的である」(『縄文農耕』学生社昭45)としている。以後いくつかの発掘調査によって栽培植物が存在したのではないかと考えられる遺物が検出されている。また数多い石皿の出土も栽培植物の加工具とする考えもあり、今後ともに論議は続く様相を呈している。

この他にも中期文化繁栄の要素といえる食料確保の主なものに「魚類」の捕獲があったという説もある。これは土錘・石錘などの漁撈具の多量出土を根拠とするものである。中期文化の背景を何に求めるかは決定し難い問題であるが、これは地理的自然条件により一概に決めることはできないと思うが、植物栽培に適した気候的条件も含め、農耕存在の可能性を考えたい。箕輪における出土遺物の在り方を見た場合においても、前述の考察が肯定されるように感じられる。とにかくこのことは今後共に大きな関心を持つ内容である。

(三) 終末期(後期・晩期)

縄文時代中期における土器を中心とした文化の繁栄については前述したが、気候の温暖化と並行して、生活も安定したことを窺うことができる。このように大繁栄をした中期文化も後期に入ると遺跡数が急に減少する。それには何か大きな原因が考えられなければならない。それは自然環境の変化(特に気温の低下)によるものと考えられている。町内の遺跡分布を見ても減少傾向が端的に現われ、広く分布していたものが河岸段丘突端や第二

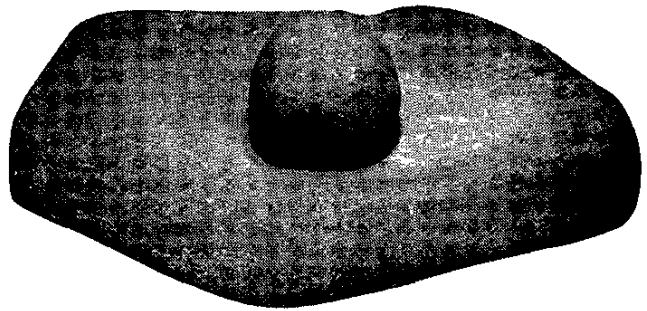


写真1・19 石 皿



写真1・20 大原Ⅱ遺跡出土土器（現高13.4cm）



写真1・21 上の林遺跡出土土器（器高12.4cm）

段丘に移っていく現象が現われる。特に晩期土器の一群が箕輪遺跡の一部、穴田・渋田・久保下周辺の段丘下の地域から出土している。このことは晩期になると段丘下の沖積面にも彼等の生活の舞台が広がったことを物語るものである。これについては第二章第三節（箕輪遺跡）にて示すが、弥生時代への移行期に彼等が低湿地帯と何らかの関わりを持ったことの証明であり、また箕輪遺跡のもつ大きな問題点の一つである。

全体的な遺跡数の減少のなかにあって、東北地方はかえって増える傾向にあった。そして独特な土器文様を持つ「亀ヶ岡文化」が栄えている。これはサケ・マスの遡上により、それが食料源となり、これによる安定生活の基が築かれた文化であるという説も生まれている。また沿岸地帯にも大きな集落址があり、これは貝塚をとまなっている。これを見たときやはり縄文人は食料を求めて移動した民であったと考えられる。

一方、西日本の北九州地方では、縄文時代晩期の遺跡から水田耕作の様子をうかがう遺物が検出され、稲作が晩期にまで遡る可能性が指摘されている。稲作農耕は弥生時代からという考えを改めることになるであろう。数千年、一万年ともいわれる長い縄文人の狩猟・採集生活も稲作農耕の伝播によって大きくその様相を変えようとしている。北九州から広まったその文化は百年余で中部地方まで伝わって来た。人々の生活は水稲耕作を基盤とした弥生文化へと移行していくのである。

三 縄文土器と生活

長い間続いた縄文時代のくらしについて時代ごとに概観してみた。その中において彼等の使用した土器は人々の生活の様子をいろいろに推測させてくれる。それではその出土状況とあわせて縄文人の生活の一部を復原してみたい。一般的遺物については各遺跡の項で記すこととし、ここでは特徴的な遺物について少くし触れる。

(一) 土 偶

縄文時代の中期の遺跡を発掘調査すると、いくつかの土偶が出土する。土偶は縄文時代の早期の終わりごろから作られはじめ、ほぼ全期間を通して作られた土製品である(写真1・22)。土偶について論ずる時、最も興味をもつことは、その使用目的である。第一に出土する土偶に共通することは、そのほとんどが女性を表現したものであること。乳房や腹部を誇張し、臀部は大きく張り出し、これは土偶が明らかに女性であることを強調している。第二に五体が完全な形で出土することがまずなく、故意に壊されたような状態で発見されることが多い。これは出土土偶のもつ二大特徴といわれ、これらを基に土偶の謎についてはいくたびか論じられてきた。

まずそのほとんどが女性であること、この背景は女性にしかない力、それは新しい生命の誕生という神秘的なできごとであり、これが土偶祭式のもつ大きな意味と考える。そして縄文人はこの土偶に秘密の力を宿したので

はないか。女であるが故に新しい生命の誕生を願い、自然界の豊作をも祈ったのではないだろうか。しかしそういう願いや祈りを持って作られた土偶もすべてが壊される運命にある。壊すために作られたのである。そこにはなんらかの「まじない」が行なわれ土偶を損壊したと推測される。また土偶そのものの形状（妊婦土偶・面を付けた土偶）、土偶の出土状況の相違（石囲いの中に埋められている。土壙の中に入っている。バラ撒かれている。住居址の内と外。）のようにそれは複雑な相違を示している。このことも土偶のもつ意味の深さを物語っている。

町内からも三十点に近い土偶が確認されているが、いずれも一部分である。その中においても八乙女五輪遺跡出土のものとは比較的整った土偶である。昭和五十五年に発掘調査された上の林遺跡の第八号住居址出土の土偶は胴部のみであるが、非常に大形で、残存部から推定して全高三五cmほどと思われる（写真1・23）。これも腹部をえぐり取った状態に壊され、破壊という強烈な手段の意味することに強いシャーマニズムを感じる。長い時代における遺物中、これほど神秘的な意味を持ったものはないと考える。四千年の昔、壊されようとしている土偶は大きな口を開いて何かを叫んでいる。私

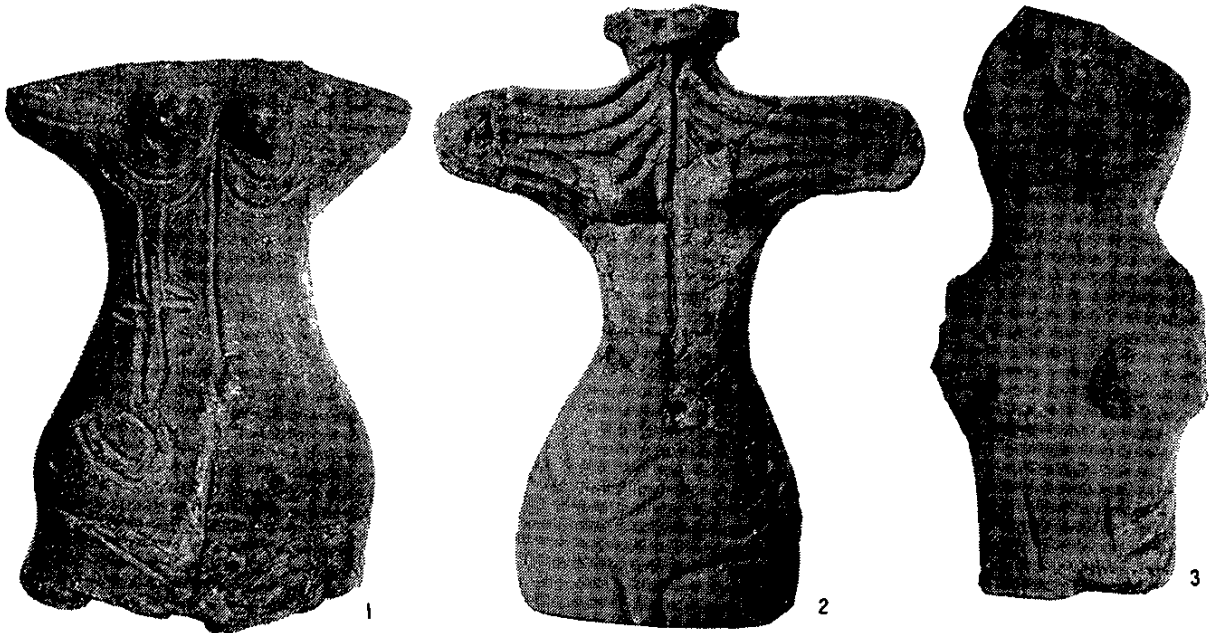


写真1・22 土 偶

1 上の平遺跡出土

2 五輪遺跡出土

3 矢田尻遺跡出土

たちに何かを語りたいのであろうか。

(二) 顔面把手付土器

縄文土器が最も豪壮になるのが中期中ごろの勝坂式文化といわれるところである。このころになると大形土器の口縁に土偶に似た顔面を取り付けることが流行する。ほとんどが土器の内側に面して付けられているが、ごくまれに外側を向いて付けられている場合もある(写真1・24)。1は上の林遺跡出土の顔面部であるが、これは明らかに外向きであり、きわめてまれな例である。2は福与大原遺跡出土の土器である。胴下部は欠損しているが、口縁部までの高さは約三〇cmで、顔面は土器の中をのぞき込むかのような感じに付けられ、柿の実状の目はつり上がり、ぽかんと開いた口は童顔を思わせる(写真1・25)。後頭部にはトグロを巻いた蛇が付けられ、土器の胴上部にもデフォルメされた蛇体が複数付けられている。最近この種の土器は女性の体を表現しているものが多いといわれているが、この土器を見る限りではそれを表わす文様など

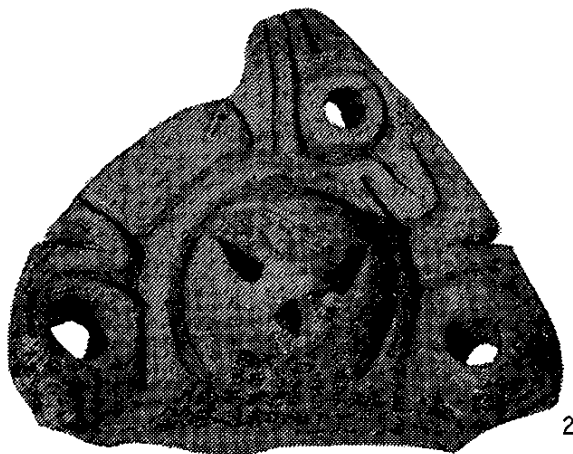
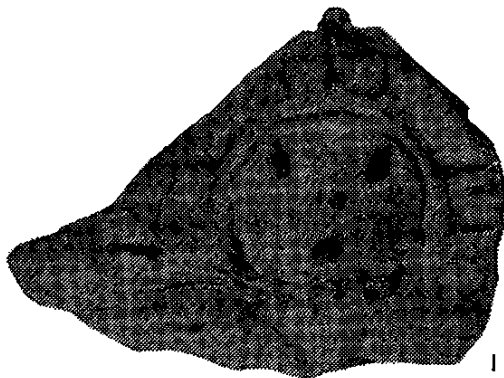


写真1・24 顔面把手

1 上の林遺跡出土 2 大原遺跡出土

写真1・23 土 偶
(上の林遺跡)



写真1・25 顔面把手付土器
(大原遺跡出土 現高30.2cm)

の生や死に関する場合のような特別な時、使い方も供献や祈りなど信仰の対象物としたのではないか、蛇体装飾土器と共通した謎の多い土器である。

(三) 蛇体装飾の土器

縄文式土器は数多くの特徴ある文化を作り出したが、私たちに強烈な印象を与えるのが蛇体を表現した土器である(写真1・26)。土器の口縁や把手に蛇体を表わすようになるのは中期中葉からといわれている。しかしそれが雄大になり、数を増すのは中期中葉の勝坂式文化(藤内期・井戸尻期)のころである。蛇体が現わされる部分は口縁や把手に集中するが、中には土器の胴部に浮き彫りされたものもある(写真1・27)。また蛇体の状態、特に頭部の表現は様々であるが、形から想像し「マムシ」を表わしたものが多いように感じる。好んで付けられた蛇体表現も中期後半の曽利期になると衰退してしまふ。あまり長期間でないこの時期に蛇体装飾の土器が数多く作られたのは何を意味するのであろうか。またこの種の土器と共に出土するものとして前述の顔面把手付土器

は特に感じさせないが、他の土器より非常に丁寧に作られ、均整のとれた優品である。多くは顔面部と土器本体が別々に出土する例が多く、顔面部のみ出土の場合がほとんどである。土器のもつ性質と使用目的などの点について考えるとき、土器そのものを人体化した、蛇体を多数表現すること、また製作状況も他と異なる点、土器の使用目的が完全に区別されていたと想像される。使用する時が人

や有孔罎付土器などがある。いずれも特殊な用途を感じさせる。

蛇体装飾土器の使用目的については多くの研究者が諸説を示している。その中において多くの人々は、何らかの宗教的な意味を持っていたと考えたようである。縄文人の生活において蛇との関わりはどのような状況下にあったのであろうか。気候の温暖化に伴い動物もその種類と数を増したと考えられる。蛇は特に気温には強く影響を受けたであろうから、数や種類が多くなったと想像される。蛇は春真先に土中から出現するという現象が見られる。また蛇そのものからくる恐怖心、マムシのように猛毒を有するもの、噛まれると死ぬという現実等々、蛇は他の動物と異なる特殊な動物である。土中から現われる「生」「再生」と噛まれた時の「死」の現象は、縄文人にとってそれは神秘であり恐れであったに違いない。そこに宗教的観念が生まれたと考えたい。そうした時の使用目的を推測する時、人間の「生・死」の現象と結びつけて考えることはできないものであろうか。土器への

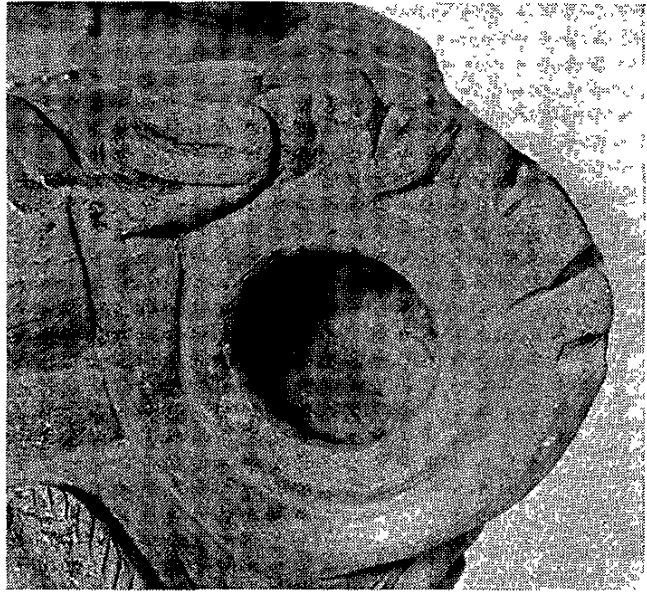


写真1・26 蛇体の表現
(幸道遺跡出土)



写真1・27 蛇体把手付土器
(大原遺跡出土 器高33.9cm)

表現方法によって、その内容も異なると思うが、単なる模様表現の一つと考えることはできない。この文化も中期後半になると、蛇体そのものの姿は少なくなり、デフォルメされて抽象的な文様へと変化しやがて消えていく。中期土器文化の一つとして数えられるものである。

(四) 有孔罌付土器

この土器は口縁部に数個から二十数個に及ぶ直径5mm程度の孔があけられ、その下に罌状突帯が付けられていることから命名されたもので、縄文時代前期末のころから見られ、中期に盛行し、中期終末には姿を消している。分布としては中部高地で発達し東日本一帯へ伝播したと考えられている。そして後半は分布の中心が関東地方へ移っている。形態としては前期の有孔土器が祖形として考えられ、浅鉢状から樽形、壺形土器へと発展していく。最も栄えた時期には形も大形化し、形態も豊富になってくる。そして終末期には注口が付くものへと変わっていく。山梨県立考古博物館では昭和五十九年にこの土器の特別展を開催し、研究の内容をまとめている。これを参考にして次のように考察した。

有孔罌付土器の変遷

- (1) 有孔土器（前期末）
- (2) 有孔土器から中間形態、有孔罌付土器へ（前期末）
- (3) 有孔罌付土器（中期初頭）
- (4) “ （中期中葉）
- (5) “ （中期後葉）
- (6) 両耳壺（中期後葉）
- (7) 有孔罌付注口土器（中期終末）

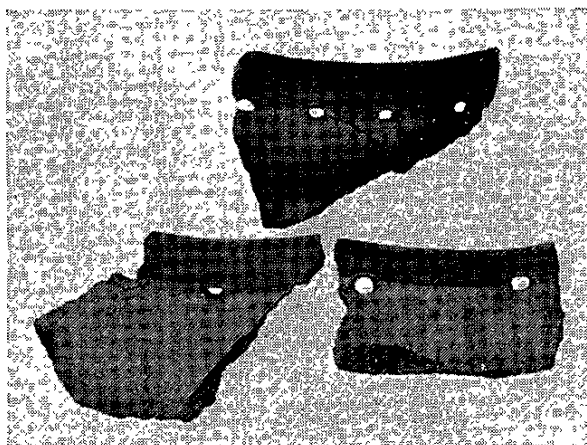


写真1・28 有孔土器(黒津原遺跡)

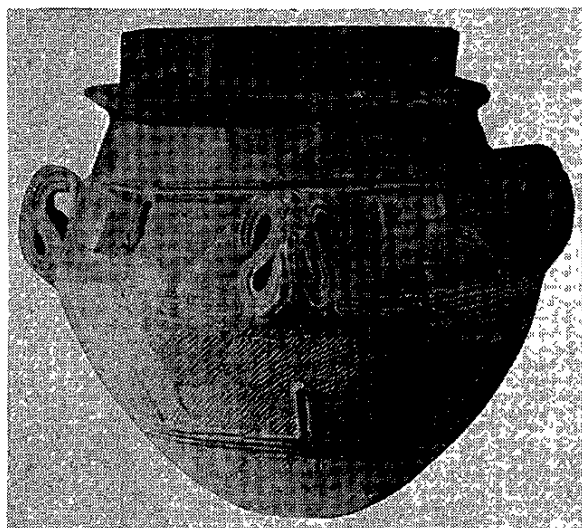


写真1・29 有孔罎付土器
(御射山遺跡出土 器高48cm)

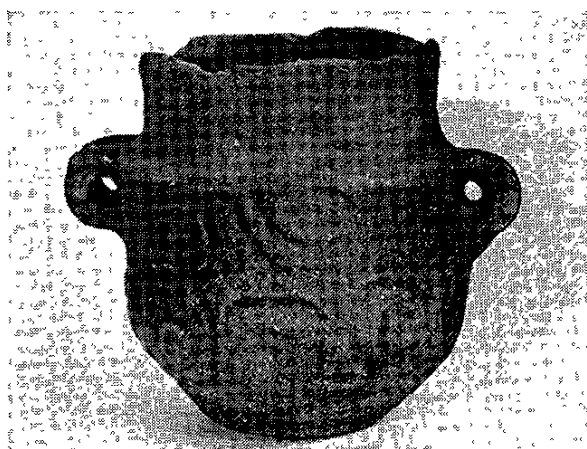


写真1・30 両耳壺
(上の林遺跡 器高13.5cm)

1 太鼓説

口縁部に皮を張り、その皮を固定するために小孔を用いたといわれる。この説は世界各地に土製太鼓が存在す

(8) 注口土器(後期以後)
この土器の変遷の過程において、(1)有孔土器(写真1・28)、(5)有孔罎付土器(写真1・29)、(6)両耳壺(写真1・30)の三形態は町内からも出土している。このことから形態的な変遷は前述のようになるものと考えられる。これら特殊な土器においては同じように問題になるのがその使用目的である。器としての主目的は中に「物」を入れることである。そうした時、形態的変遷から考え、中に入れたものを液体であると考え、その使用目的を「酒造具」と考えたのである。現在のところこの説が最も合理的で妥当であると思われるが、これまでいくつもの説が考えられた。それを記すと次のようになる。

ることから類推されたものである。土器の変遷や小孔の状況から皮を張って太鼓として使用したと考えることは無理があり、太鼓説は否定的な考えが多い。

2 澱粉質食料の保存容器説

土器の作りが緻密であることから、湿気を防ぐのに良いと考えられた。また顔料の塗布によって内部の澱粉が乾燥した状態で保たれるとする説である。

3 煮沸用具説

胴下半から底部にかけて、火を受けた痕跡のあるものが存在したことから、口縁部の小孔に紐を通し、吊した状態で煮沸するための容器という説。

以上の諸説が考えられている。それぞれに一考されるところもあるが、支持される部分は少ない。町内出土のこの種の土器をみる時、特筆されるものとして、昭和五十四年（一九七九）の発掘調査により三日町上棚の御射山遺跡から出土した例である（写真1・29）。この土器は住居址内から他の多数の土器と共に出土し、その法量は高さ四八cm、口径三四cm、胴部最大径四九cmを測り、容量は四五・九ℓ程度と推定される。土器の特徴である鏝は断面が三角形を呈し、厚くしっかりとしたものである。鏝に接するようにして十三個の小孔が口縁を一周している。肩部には四単位の巨大なX字状把手が付き、それぞれが隆線によって連結されている。この土器は最盛期末期の曽利Ⅰ式期と考えられ、県内出土例としては最大の優品である。写真1・30は上の林遺跡出土の両耳壺で変遷の過程を示す良い資料である。有孔鏝付土器は使用目的をめぐり今後共に興味を持つ土器である。

(五) 埋 甕

縄文土器は住居址内外から多数発見され、それ等は博物館等の施設に陳列されている。その土器をみる時、最も大形であり、その割に完形品の多い一群が目につく。口縁部が平らな平縁の深鉢形土器で、器面は唐草文が全面に施文されている。

この土器は縄文中期後葉の曾利Ⅱ式が中心である。この種の土器は住居址内の床面下に埋められた状態で検出されることが多く、いわゆる「埋甕」と呼ばれるものである。その多くは住居址内の入口付近に位置し、口縁が床面と、同一面くらの状態で埋められている。ときにはその上に平石の蓋をしたものもあり、その出土の状況が異なっている。それらはおよそ次のようになる。

- (1) 正位（口縁を上にして）で単独
- (2) 正位で複数
- (3) 正位で石蓋付
- (4) 正位で石蓋付複数
- (5) 逆位（伏甕になっている）で単独
- (6) 逆位複数
- (7) 正位底部穿孔

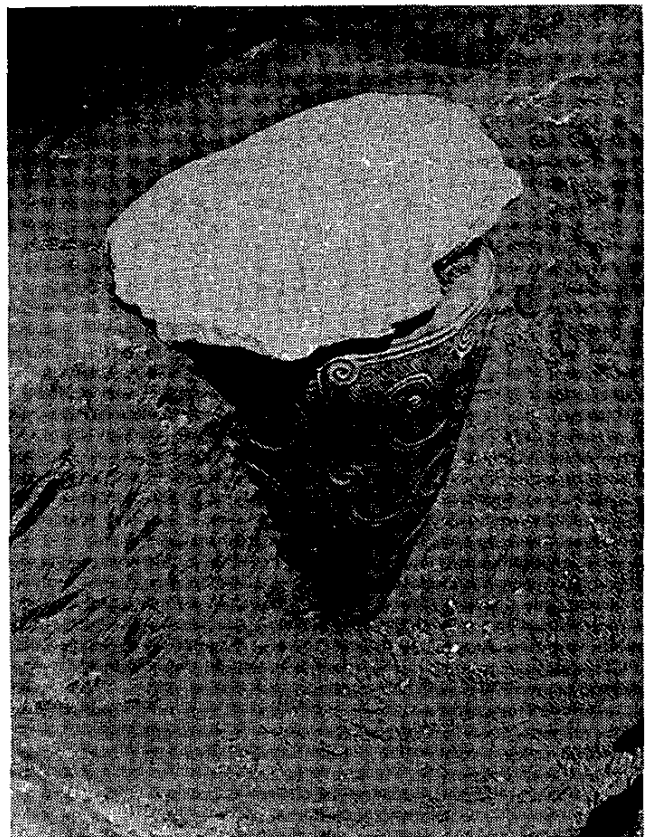


写真1・31 石蓋付埋甕（上の林遺跡）

(8) 逆位底部穿孔

その出土の状況も多岐に及んでいる。埋甕は生活における風習の一つと考えられるが、この土器も使用目的に次のような説が考えられている。

- (1) 貯蔵用具説
- (2) 建築儀礼
- (3) 胎盤収納説
- (4) 早産や死産などの子供を埋葬する施設
- (5) ネズミ落し説

昭和五十六年（一九八一）に発掘調査された山梨県釈迦堂遺跡（縄文時代中期）から逆位底部穿孔土器（逆に置かれ、底に穴が開けられている土器）の中に骨粉と首飾りではないかとみられる中央部に穴の開いた円板の土製品が十個入っていた。土器内の骨粉の発見や副葬されていた首飾りとみられる円板状の土製品の出土は幼児などの埋葬説が有力となったと考えられる。写真1・31に示したものは昭和五十五年（一九八〇）に発掘調査された上の林遺跡第九号住居址の石蓋付埋甕の出土状況である。この土器は器高五七cm、口径四〇・五cmを測る大形で、厚さ五cmの粘板岩質の平らな石で蓋がされていたのである。この出土例は埋甕ではよく見られる状況である。これをみると埋葬形態を予測するのが適当と思える。

四 弥生時代

弥生文化の伝播 採集と狩猟が生活の基礎であった縄文社会は晩期終末に至って大きな転換期を迎えた。それは大陸の農耕文化の促進的な影響を受けて稲作を中心とする生産経済に移ったことである。そして米を主食とす

る日本人のその後の歴史はこの弥生時代からスタートすることになる。

米の故郷は東南アジアであり、大陸から直接か、あるいは朝鮮半島経由で北九州にまず渡来した(図1・3)。

米と共に人間そのものも移住し、したがって稲作の技術・道具・稲作に伴う祭りなどの風習ももたらされたのである。道具の中には鉄器があり、石製の工具(磨製石器)もあった(写真1・32)(図1・4)。このように弥生時代は金属器と大陸系の磨製石器、そして新しい農耕儀礼がもたらされた農耕社会の時代である。この新しい米の文化は急速に西日本一帯に拡がり、その東端は濃尾平野まで及び、ここまで伝わるのに半世紀ほどを要したと思われる。東進した弥生文化は東日本一帯に残っていた縄文文化に進路を阻まれ、一旦小休止をするが、やがて

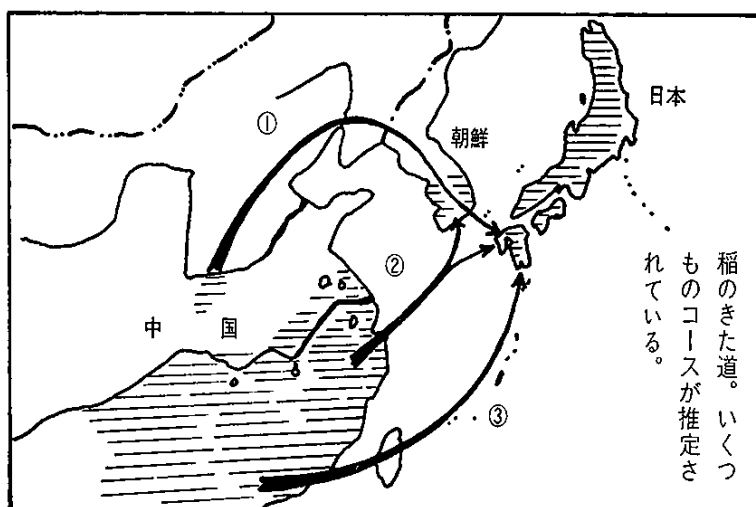


図1・3 米の渡来図

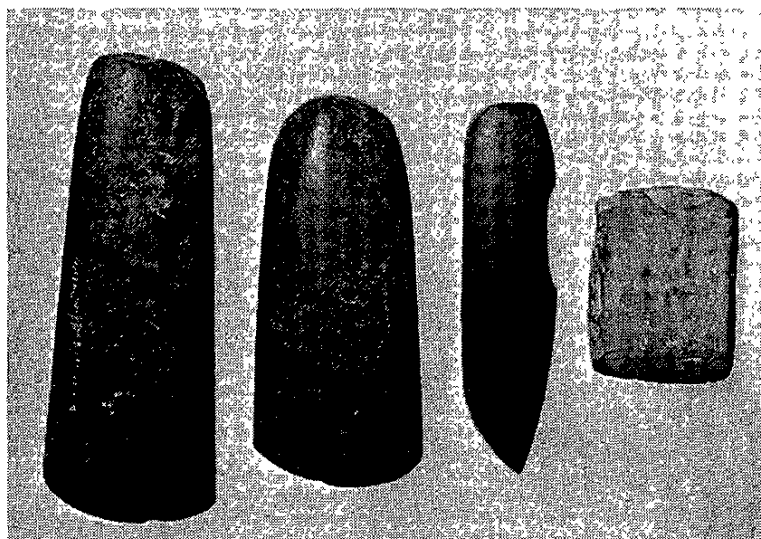


写真1・32 弥生時代石器(箕輪遺跡)

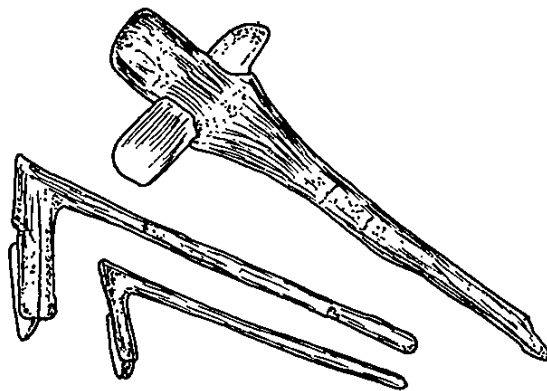


図1・4 石器着柄図

次の波となり東海地方へまた天竜川水系へと進出したのである。伊那谷へその文化が入ったのは弥生時代前期末から中期初頭にかけてのころである。

弥生時代はおよそ紀元前三百年ごろから紀元三百年ごろの約六百年間といわれ、その間を三分し、前期・中期・後期に三大別される。

さて前期末ころに一部伊那谷に入った文化は一定の地域にその時代ごとの特徴を残しながら北上したのである。それは縄文時代同様に土器形式をもって細分している。下伊那の玄関口である豊丘村の「林里式」、中期前葉の「阿島式」、高森町の「北原式」、そして飯田市から出した後期後半「中島式」とそれぞれの土器形式が設定され、時代的変遷を示している。

弥生時代の箕輪 箕輪における弥生時代の動向を見る時、箕輪遺跡を除いて語ることはできない（細部は第二章第三節に示す）。土器を見ながら伝播の状況を記すと、上伊那では波及期の土器ともいわれる水神平式土器が何か所かの遺跡から確認されている。箕輪においても箕輪遺跡と沢の北溝遺跡から出土が認められている。この土器は東海地方の遺跡を標式としており、土器文様は貝殻の背で施文したものである。この土器が伝わったところは縄文文化が当然残っており、箕輪遺跡においては縄文晩期の土器を伴っている。続く時期として飯田市の阿島遺跡出土の土器を標式とした「阿島式」と呼ばれる土器が出土している。やはり箕輪遺跡御室田からの出土である。

このように天竜川を溯った文化はまず沖積面の低湿地帯に開花したことがうかがえる。波及期においてすでに稲作の技術が伝わったかは疑問であるが、低湿地帯から遺物が多く出土していることに注目したい。中期後半になるとそ

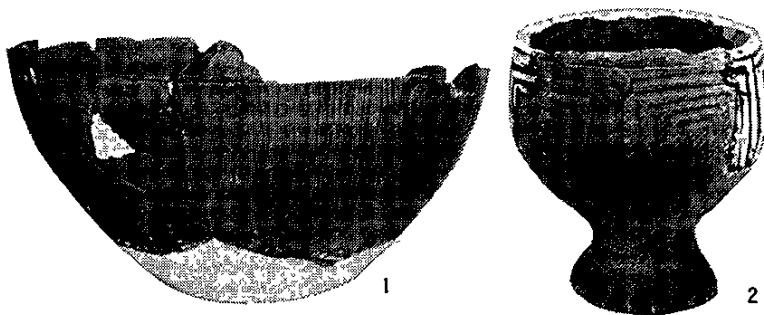


写真1・33 北原式土器

1 箕輪遺跡出土（現高13cm） 2 上の林遺跡出土（器高12.4cm）

れまで一部だけであった遺跡も段丘上や扇状地上にも見ることができるよう（上の林・北城・猿楽・福与北垣外、本城遺跡等）。しかしそこにおいても沖積面との関係は深く（写真1・33）、たとえば上の林遺跡と箕輪遺跡のように同じ北原式土器が出土していることなどから、段丘上突端に住居を置き、下段の湿地帯で稲作をしていたと考えられる。箕輪遺跡において稲作が行なわれていたことは疑いのないことであるが、その初源の時期をどこにもとめるかは一つの大きな問題点である。

後期になると遺跡数は増し、分布範囲も広くなり、山間地へも進出している。このことは稲作のみならず畑作の普及を感じさせる。

そして中島式土器の分布を中心とした一つの文化圏が形成されてゆく時期でもあり、それは「伊那」の国への成立過程を物語るものと考えられる。中央自動車道に関する遺跡の発掘調査において、堂地遺跡から確認された「方形周溝墓」は特定の人の墓である（図1・5）。このことは地方にも権力者が出現したことを示しており、これは古墳出現の前兆であり、次期古墳時代への幕開けを示している。

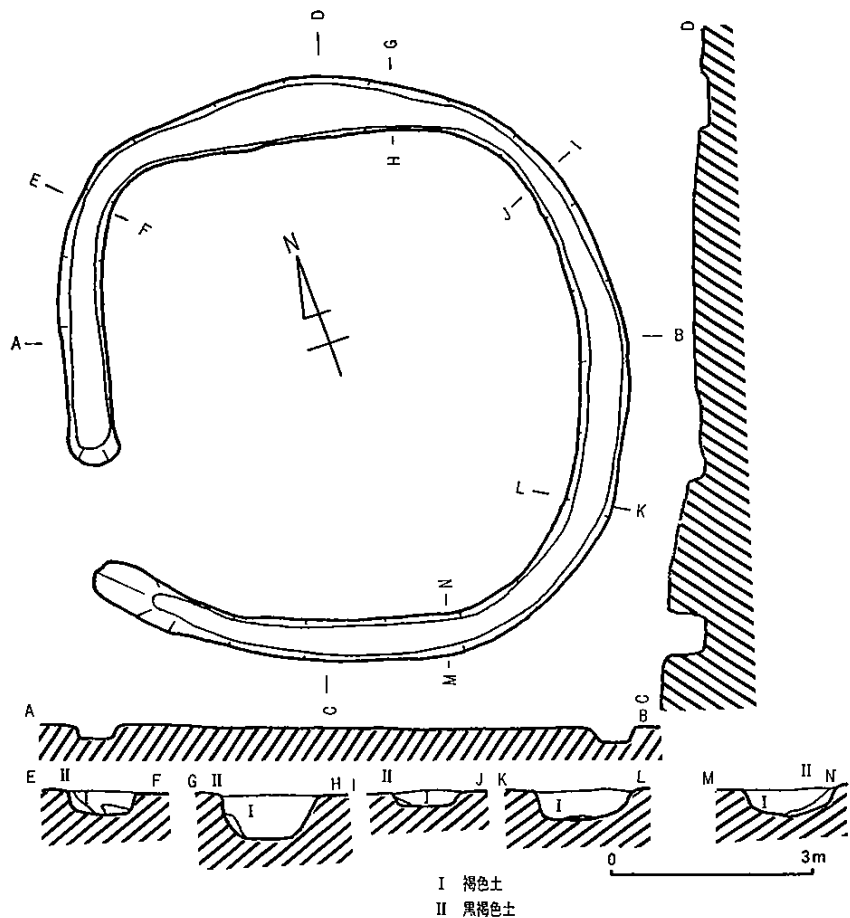


図1・5 方形周溝墓

五 古墳時代

(一) 古墳の出現

大陸から伝わった農耕と鉄器文化は、弥生時代と呼ばれる新時代を築き、集団を支配した権力者は次第に統合され、畿内に一つの中央集権の国家ができたのである。この時期は三世紀末から四世紀の初めころであり、同時に高塚の大きな墳墓が出現する。これは地方にも伝わり各地に多数の古墳が作られるようになる。この文化は八世紀初めまで続き古墳時代と呼ばれている。その間を三期（前期・中期・後期）に分けて考えることが多く、中期の五世紀代には前方後円墳に代表される大古墳が造られている。後期から終末期になると地方に小古墳が無数に造られる。古墳の変遷は地方の社会状況や統一国家の進展状況を知る上で重要であり、古墳から出土する副葬品は当時の文化を如実に物語る遺物である（図1・6）。

(二) 箕輪の古墳

町内に分布する古墳をみる時、まず松島王墓古墳に注目しなければならぬ。上伊那では一基だけの前方後円墳であり、中央のくびれ部の左右に造り出しがつけられている点では長野県下唯一の車塚形式の古墳である。この古墳が箕輪に存在することは、当時の政治・経済・庶民の生活等を考える上で大変重要な意味を持っている。

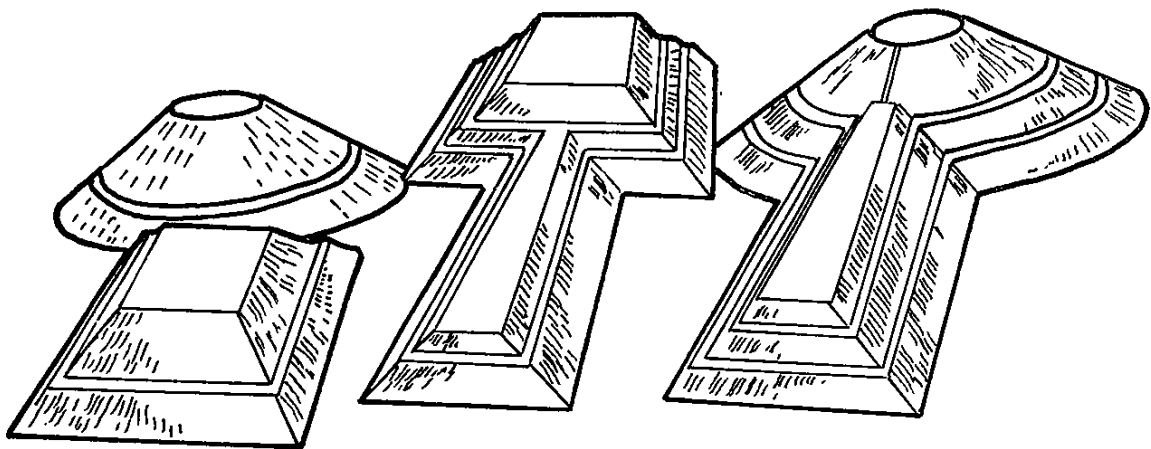


図1・6 古墳形態図



写真1・34 埴輪（松島王墓古墳出土）

古墳を墳丘の形状から見たとき、数種類の形式に分類されるが、王墓古墳以外は円墳である。古墳の立地分布を地形的に見た時、およそ次の四群に分けることができる。

(1) 松島王墓古墳群 松島区北部で深沢川右岸段丘上に位置する王墓古墳を中心とするもので、現在陪塚が一基確認されるが、以前には他にも何基が存在したと伝えられている。

(2) 長岡古墳群 長岡地籍一帯に展開する多数の古墳で、町内で最も密集した地域である。現在十二基ほどが確認されているが、消滅した数は十数基といわれている。羽場の森古墳（一・三号）によって代表される（写真1・35）。

(3) 三日町古墳群 三日町・福与地区に分布する五基の古墳で、形を留めるものは少ない。三日町上棚の段丘上に位置した天王塚古墳は一帯の圃場整備事業により消滅の運命にあったが、昭和五十七年の調査後、箕輪町郷土博物館前庭に移転復元されている（写真1・36）。

(4) 西部山麓古墳群 竜西の山麓に分布する古墳で、一の宮地籍に二基、下古田に三基が確認されている。他にも存在したという伝承が残っているが不明である。

町内に分布する古墳は以上の四群の中にほぼ含まれるが、墳丘を留める古墳は少なく消滅したもののやわずかにその形跡を残すだけのものが多い。これら

の古墳は箕輪にはいつごろから造られたのであろうか。

松島王墓古墳についてはその築造年代を六世紀後半と推定しているが、出土遺物や埴輪などからその時期と考える。小円墳は一般的には古墳時代末期に集中して造られたといわれるが、すべてがその時期のものではない。町内の小円墳においても出土資料が少ないため判断は難しいが、群内の状況から推測して六世紀末か七世紀に入って小円墳が造られ始めたのではないかと考える。

(三) 人々のくらし

農耕文化が定着し人々は田畑の開墾に力を入れ、特に水田面積を広げるため、水路や堰を造り土木工事を実施している。箕輪遺跡の発掘調査において、その工事の様子を示す遺構が検出されている。このことは工事に使用した道具類の改良が進んだことを物語っている。多数発見された木杭は鉄の刃物で鋭く削られており、鍬や鋤にも鉄の刃先が取り付けられている(写真1・37)(写真1・38)。こうした鉄の普及は人々の生活のあらゆる面に



写真1・35 羽場の森第3号墳



写真1・36 復元された天王塚古墳

第1章 考古学よりみた箕輪町

大きな影響を与えたのである。

次に定住化した人々の家はどのようなものであったか。一般庶民においては弥生時代の家同様竪穴住居であるが、その構造に変化が見える。それは軒が上がってくることで、家の中に炉を設けていたのがそれに代って奥壁に付けて「竈」^{かまど}を設置することである（写真1・39）。そして煙道によって煙を家の外に出すように考えられている。竈の設置は煮炊きに使う器にも変化を生じた。



写真1・37 刃物痕を示す木製品 杭 鋤
(箕輪遺跡出土)



写真1・38 水田の畔（箕輪遺跡）

(四) 新しい器

古墳時代初頭においては弥生時代と同じ赤色の土器を使っている。「土師器^{はじ}」という。これは弥生式土器の技術から発展したもので、これを専門に製作する集団が現われ、同一規格の器を大量に生産するようになる。そして製作段階において「ロクロ」を使うようになり、均整のとれた薄手の器が作られるようになる。古墳時代の中ごろになると朝鮮半島からの帰化人が多くなり、それらの工人は高度な陶質の器「須恵器」をもたらした。最初のうちは一部の人々と、祭祀に用いられていたが、工人も次第に地方に進出し、窯を築き、大量に生産したため一般庶民の間にも普及していった。以後平安時代まで土師器と須恵器は共存しながら使われたのである。町内出土の土師器、須恵器の変遷を見る時、土師器の最も古いものは三日町澄心寺下遺跡出土の小形丸底壺などであり、古墳時代中期五世紀にあたり「和泉式」に比定される。これに続くものとして福与卯の木北垣外遺跡、箕

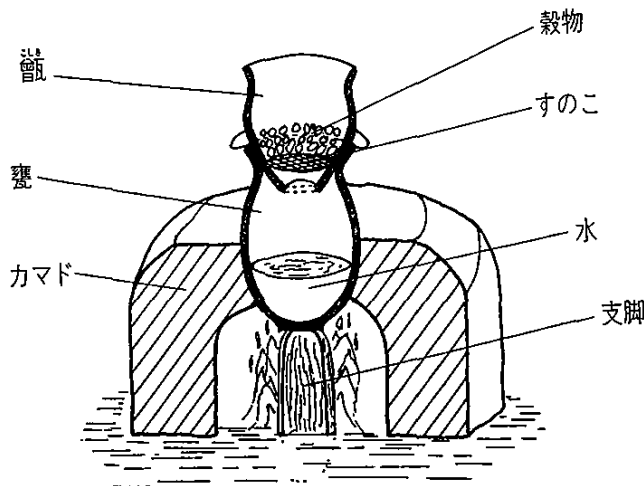


図1・7 竈の構造と使用法



写真1・39 竈状況（大原遺跡Ⅱ）

輪遺跡出土の土師器などがある。七世紀以後奈良時代に入ると、中道遺跡をはじめとして須恵器の出土量も多くなってくる。

六 奈良・平安時代

古墳時代後半、箕輪を中心として大きな経済力と権力を持った集団ができた。その証が王墓古墳であることは前述したとおりである。これに続く古代社会は律令体制のもとで階層文化がよりおし進められた時代である。中央政権は国府・郡衙を設置し、国司・郡司を派遣している。また地方との連絡を密にするため、官道を配備し、その一つである「東山道」が開削された。これにより中央の政治・経済など新しい文化が急速に伝わった。官道の開通は歴史上大きな意味を持っている。

この状況下において地方では税制がしかれ、戸籍がつくられ、律令制社会が整っていったのである。しかしこの体制は長くは続かず、それに代って荘園制が出現してくる。また平安時代中ごろには駅制もそれを維持できなくなり崩壊していくのである。

このような時代背景にあって一般庶民の生活はどのようなようであったのだろうか。住居の様子は基本的には縄文時代から続いている竪穴式の家に住み、弥生時代中ごろから伝えられた水稻農耕に一段と力を入れた生活であったと理解される。町内におけるこの時代の住居址の分布状況をみると、天竜川右岸の河岸段丘上のベルト地帯が最も密に分布し（南城・北城・上の林・中山・本城・中道の各遺跡）、段丘下にも進出している。これは沖積面の水田としての利用度が拡大したことを意味するものであり、集落も大規模になっている。また天竜川左岸段丘上にも同様な遺跡を見る。平安時代中ごろからは遺跡が中小河川の上流や扇頂部へ上がっていく傾向がみられる。



写真1・40 土師器と須恵器（木下鍛冶屋垣外遺跡）

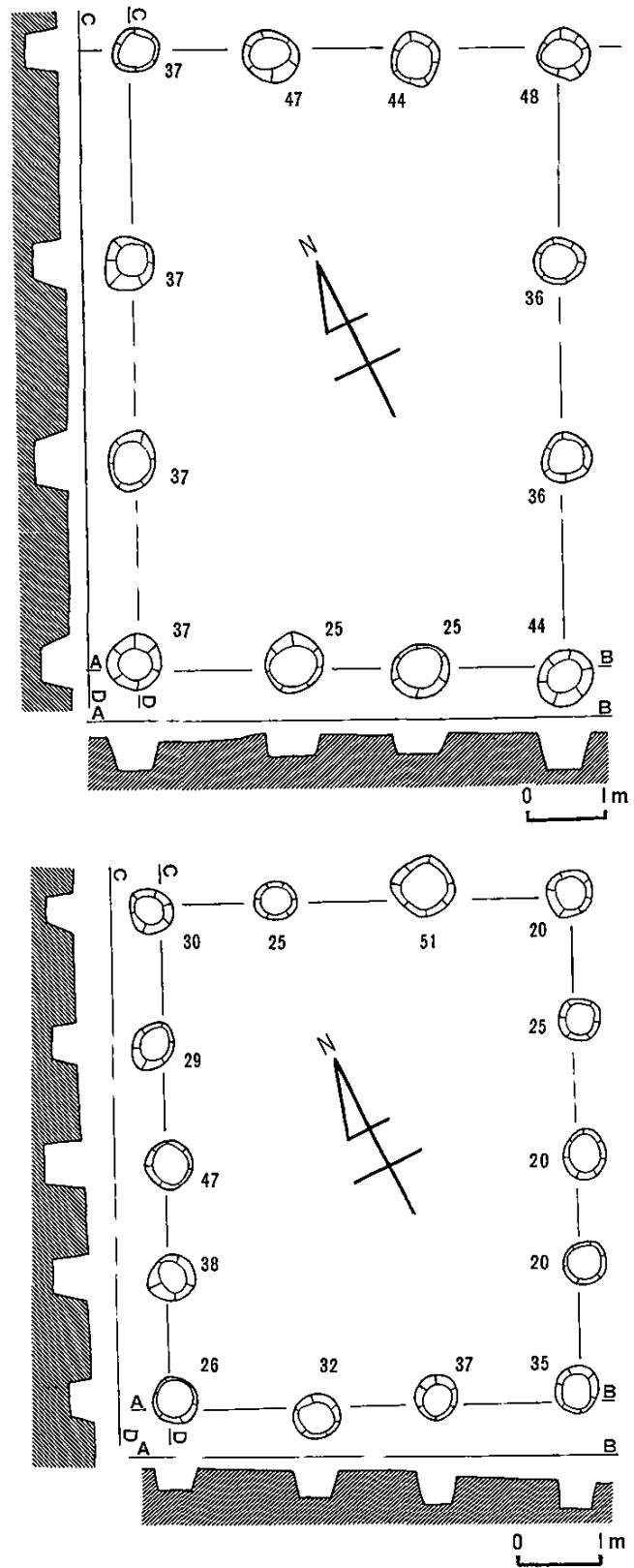


図1・8 柱列址（堂地遺跡柱列-3、柱列-6）

（一の宮B・五斗山・堂前・長田以上竜西地区、下の観音・御射山・田畑・石仏以上竜東地区）。彼等は生活の基盤を何に求めたのか。山林・畑作・牧場経営かあるいは山麓に点在する湿地帯に目をつけ水田耕作をしたものか、いずれにせよ生活の舞台は広い範囲におよんでいる。このような現象の基本的背景には人口増加を考えなければならぬ。

検出される住居址や遺物を観察する時、貧富の差や主従の関係を想像させるような遺構が発見されている（図1・8）。また倉庫や大形建造物を推定させる遺構が目につき、集落共同体の結びつきがより進んでいることが考えられる（写真1・41）。

人々の精神生活や信仰の様子を知る遺物として箕輪遺跡出土の人形・馬形などがある。これは都の文化が直輸入された証拠の一つであり、信仰や祭祀の状況を知る上で貴重な遺物である。

七 中 世

鎌倉時代から室町時代を経るこの時期は、平安時代同様、地方においては文書による記録はほとんど残っていないため、考古学が果す分野が広まりつつある。

町内の発掘調査において、中世の遺構・遺物が各所に見られるが、その主なものは次のようになる。

昭和四十七年に実施した木下北城遺跡から検出された(写真1・42)「中世火葬墓群」は、この時期の考古学的遺構としては、貴重な発見であった。中世の館を囲む濠の跡が自然埋没した凹地の斜面を利用して設けられたものであり、二十基以上も検出されている。火葬墓出土の古銭の中に、永楽通宝が含まれているが、これは明貿易によって輸入されたものであるから、使用時期は十五世紀後半から十六世紀前半と推定される。また他にも黄瀬戸陶片や鉄釉・天目茶碗片が火葬墓内から出土している。周辺からは常滑焼甕・古瀬戸碗などが多数出土して



写真1・41 大形建造物址(上の林遺跡)

平安時代と聞けば中央の貴族文化や生活を推測したくなるが、地方の庶民は全般的に苦しい生活環境に置かれていたのである。

住居の状況は依然として堅穴式のままであり、この形態は一部江戸初期まで残ったものと思われる。庶民が高床の住宅に住むようになるのは江戸時代に入ってからであり、土間の上に真^{こき}蔭などを敷いていることが多かったようである。

いる点から、一帯が当時の生活の舞台であったことをうかがうことができる。

同じ段丘上において、南城・猿楽・上の林から本城遺跡へと遺物や遺構の検出を見ることができ。このことは、段丘上が奈良・平安時代から引き続いて人々の居住地であったことが推測される。

昭和四十八年十二月に発掘調査を実施した、八乙女五輪遺跡からは、中世の竪穴址が二か所検出されている。第一号竪穴は東西二m、南北一・五mの方形プランを有する竪穴と、その内側に南北一m、東西一・三mのやはり方形の竪穴が二段式の状況で発見された。竪穴の内部には、焼土塊と半焼の板材及び自然石が焼けた形で検出された。遺物は鎌倉期と考えられる内耳土器が発見されている。第二号竪穴は第一号竪穴の東側に発見された竪穴址である。大きさは南北一・五m、東西一・九mで深さ六〇cm、隅丸方形。出土遺物は古瀬戸灰釉平茶碗で室町期のものと考え。第一号竪穴より新しいことは明らかである。

また図1・9に示したものは掘立建物址で、柱間芯々において、九尺×九尺を計る掘立建物である。出土遺物より桃山時代から江戸時代初期の建物址であろうと推定される。またこの他にも、掘立建物址と思える遺構があり、中世の遺物を伴出している。鎌倉期の常滑の折縁鉢、明時代の青磁碗、染付茶碗、白磁碗、また室町時代では古瀬戸灰釉平碗、美濃の灰釉鉢、桃山時代の天目茶碗等多数の出土をみている（写真1・43）。

これ等の出土遺物の発見されたこの地が、文献に見える最初は、宝徳三年（一四五二）八月に、信濃守護職小



写真1・42 火葬墓（北城遺跡）

第1章 考古学よりみた箕輪町

町内各地からは、中国との貿易による輸入品が多く発見されている。青磁・白磁それに宋銭などが目に付く。また箕輪遺跡の水田跡からは中世の遺物もかなり検出され、水田耕作が広範囲に整備されていたことを物語っている。竜東段丘上においても、大原遺跡や黒津原遺跡からは天目茶碗・青磁・内耳土器などがそれぞれ出土している（写真1・44）。

笠原持長による諏訪下社への神領安堵の文書である。この時に八乙女なる記載が見える。このことは文献史料との関連が、考古学的調査により解明された一つの例と考えてよいのではないだろうか。

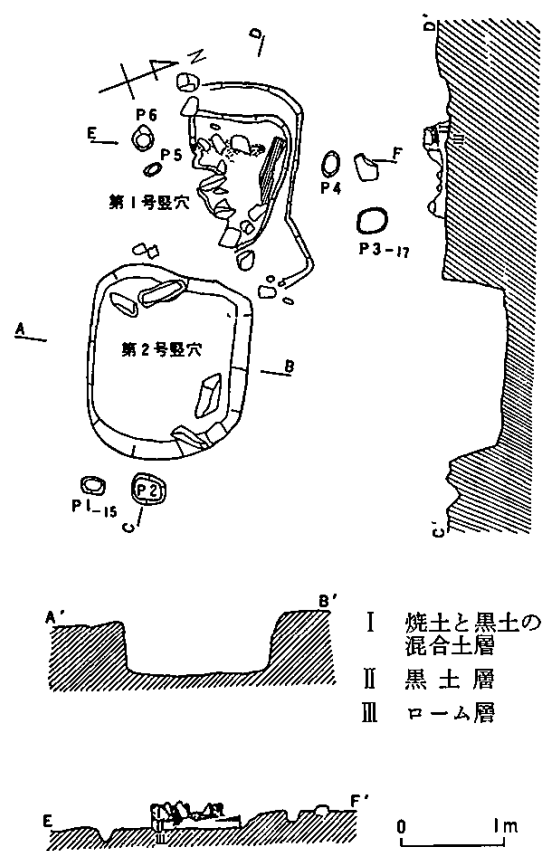


図1・9 竪穴址（八乙女五輪遺跡）

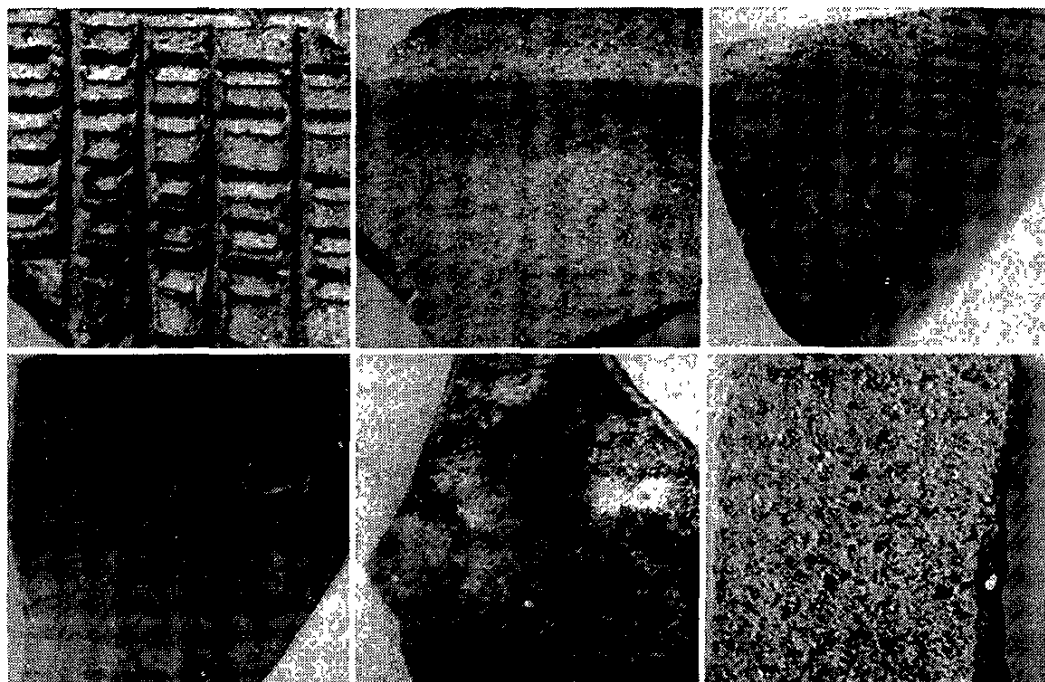


写真1・43 中世陶器（八乙女五輪遺跡）

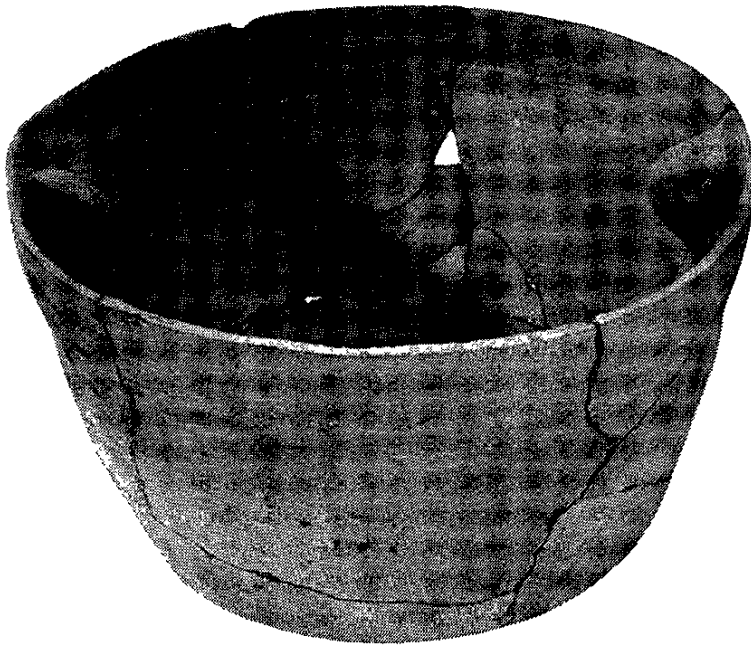


写真1・44 内耳土器（黒津原遺跡出土 器高16.7cm）

町内全体のこの時代の遺跡分布を見たとき、それらの場所が今日の村落の状況とかなり相違していることがわかる。このことは中世から近世に移行する時期において、村落の位置が移動したり、消滅したことを物語っている。前述したように、地方に於いては中世文書が新たに発見される可能性は極めて希薄である。従来、残されている中世文書類は先人の研究者によってことごとく研究しつくされている現状である。従ってこれらの文献だけに依存してただけでは、地方の中世史研究は新しい方向へと進展していかないのではないか。

文献史料は時の為政者達によって、自分達が都合のよいように修正を加えてある場合が割合に多く、その信用度が問われるところである。一方考古学的調査方法を用いて検出された遺構・遺物はまさに、その場から出土したという強い面を有している。発掘調査によって検出される中世遺構には次のようなものが一般的である。

堀址、住居址、地下倉址、竪穴、窖址、井戸址。中世遺物としては次のようなものがあげられる。陶磁器、古銭、砥石、金属器類。

中世遺物のなかで最も注目されているのは陶磁器類であり、これらは熱残留磁気測定法を用いることによって四半世紀の編年組みが確立されている。さらに、研究者仲間では十年単位の編年組みが可能であると叫ばれている。

出土した陶磁器の器型、釉薬の状態等々の諸要素によって、中世荘園村落の実態がある程度究明できるのである。以上、述べてきた事柄からして、今後、新しい中世史研究には考古学的知見を多くとり入れなければならないと考える。